

# 共同研究「戦争の語りと現代若者の戦争観に関する研究」について

酒 井 千 絵

## 1 若者世代と戦争の記憶

関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班では、2011年度より共同研究「戦争の語りと現代若者の戦争観に関する研究」を進めてきた。研究開始から3年間は、関西大学を中心とする大学生計23名にインタビューを行い、これを分析していくつかの問題やテーマをたてて、分析を行ってきた。研究開始から4年近くがたったが、今号の紀要より、昨年度まで人権問題研究室研究員を務めてきた豊田真穂による「家族と語る戦争」を皮切りに、順次論文を発表していくこととなる。そこで、はじめにジェンダー研究班が調査を行うに至った経緯と調査の概要を簡単に説明しておく。

ジェンダー研究班は、これまで大学生に対するジェンダー意識調査を中心に調査研究を行い、教育によってこれを学生に還元してきた。2008年に開始した、研究員・委嘱研究員による共通教養科目「ジェンダーで読み解く戦争」はそのうちのひとつである。このリレー講義は、前期と後期に、同一内容を異なる学部の学生に対して開講しており、各学期100人から400人程度の学生が受講してきた。

講義担当者は、毎学期の授業内で、受講学生を対象に授業の理解度や戦争に関する知識についてアンケートを行ってきた。このアンケートから、現在の大学生は、授業で取り扱われることの多い第二次世界大戦について基本的知識を共有していないのではないか、戦争をジェンダーの視点から捉える授業内容に対し、ジェンダーという分析軸そのものへの認知度が下がっているのではないかという疑問が出てきた。

また、人権問題研究室では、2007年に人種民族研究班が、「歴史認識と歴史教育—歴史教科書をめぐる議論とドイツ—ポーランド接近の道」と題する国際シンポジウムを開催して以降、戦争の記憶と継承を重要なテーマとして研究してきた。2010年には、人種民族研究班にジェンダー研究班も加わって、国際シンポジウム「歴史認識と歴史教育Ⅱ」を開催し、ドイツ、中国、韓国から専門家を招聘して歴史教科書問題、戦争の記憶に関する教育をはじめとする社会的継承について検討した。この時期、日本と中国や韓国、さらには東南アジア諸国との間で、戦争時の記憶をめぐる政治的課題が浮上し、戦争の記憶が政治的な課題として広く認識されるようになっていった。また、ジェンダーや階層、地域、世代によって、戦争経験とその記憶に相違があることが明確になり、特にアジア太平洋戦争においては、戦争の実体験を持つ人の数が年々少なくなる中で、国が戦争の記憶の一つのものとして国民に強いることの暴力性が問題になっていった。

こうした問題意識のもとで、私たちは、現代社会を生きる大学生、若者が、どのようにその記憶を継承しているのかを実証的に調査する必要性を痛感するようになった。今回の調査で対象とした大学生や、「ジェンダーで読み解く戦争」の受講者たちは、すでに1990年代生まれの世代となっており、本人はもちろん、両親の世代も戦争を経験していない。かろうじて戦争経験を持つ祖父母との交流は限られており、その祖父母でさえも、戦争中には子どもで、あまり戦時中の記憶はないという世代が中心になりつつある。アジア太平洋戦争を直接知るものが減少する中、戦時の経験をめぐる語りや戦争が起こった原因についての議論を、どのように継承していくのが課題となっている。だが、戦争をどう教えていくべきかという問いについて、有効な議論を行うためには、今の若者が、実際に何をどのように継承しているのかをまず明らかにする必要がある。

また調査と平行して、実際に教育現場で戦争の歴史を教えている教員の指導経験や、日本以外の国における歴史認識とその伝達について、研究会などの機会を用いて情報を共有してきた。まず2011年夏に、京都府立桃山

高校教諭の金山颯子先生、帝京大学文学部准教授の中山京子先生（肩書はともに当時）を招いた合宿ワークショップを行い、主に初等・中等教育での社会・歴史の授業における戦争、また日米の教員が合同で行うパールハーバー教育ワークショップなどについて発表をいただいた。2013年秋には、大阪府立高校で社会科を担当する金田修司先生とフリッツ・パウアー研究所ユダヤ博物館教育部門長のマルティン・リーパッハ博士を招いて国際ワークショップを開催し、ドイツと日本の高校歴史教育について議論した。このワークショップの概要は、『関西大学人権問題研究室紀要』68号に掲載されている。

## 2 調査の概要

はじめに私たちが分析に用いた調査データについて、調査対象者の選定や調査の進め方などの方法について、説明しておく。

主要なデータは、2011年から2014年にかけて、関西大学を中心とする関西圏の大学に在学する大学生23名（男子11名、女子12名）を対象に行った、半構造化面接による戦争記憶の継承についての語りである。私たちは、戦争について学生たちが学んだり話したりする場を、主に1) 祖父母や両親などの年長者から実体験や、間接的な経験が語られる家族内などの親密な場、2) 「学校教育」内での通常授業や、修学旅行、総合学習、3) テレビや映画、書籍、ゲームなどのメディア作品の消費、の3つにわけ、それぞれについて具体的な経験を聞きとることをめざした。また、大学生が現在戦争の歴史をどの程度分かっているのかといった知識の多寡や正誤を問うのではなく、子ども時代から現在にいたる経験を、現在の時点でどのように理解し、現在の歴史認識につなげているのかを知りたいと考えた。そこで、調査対象者には、インタビューの前に簡単な質問紙（1）に記入を依頼し、インタビューで取り上げられる話題について理解を求めるとともに、子ども時代の記憶を呼び起こすきっかけをつくってもらった〔付表1〕。

調査は、ジェンダー研究班メンバーが分担して、1対1の対面で行い、調査対象者の許可を得て、音声を録音した後、文字おこしを行ったデータを研究班全体で共有して、分析を行った。調査対象者は、研究班メンバーが関西大学および他の関西圏の大学で担当している講義や演習を通じて呼びかけ、調査に応じてくれた学生に調査内容を説明して同意を得た。調査途中で研究班メンバーの担当科目が文学部や社会学部など人文社会系の専攻に偏っているため、理系分野の学生の事例が少ないことが問題となった。そこで、2014年度には、外国語科目の授業時に調査対象者を募集し、3名から協力を得ることができた。調査対象者は付表(2)の通りである。紀要論文では、調査対象者を番号(調査時期順にふっている)と性別(M/F)で、たとえば1Mのように表記する。

また、日本の大学生の語りと比較する目的でドイツの学生に聞きとり調査を実施した。まず2012年9月6・7日、2010年のシンポジウム、2013年のワークショップにも登壇いただいたマルティン・リーパッハ博士の協力を得て、ギムナジウムの生徒を対象に行った調査がある。リーパッハ氏は、フリッツ・バウアー研究所・ユダヤ博物館教育部門長を務め、同時に、フランクフルト市(ヘッセン州)のギムナジウム(中等学校。中学・高校が一体化された8年制の学校。日本と異なり、通常10歳から17~18歳まで在籍)である「リービッヒ・ヨーロッパ・スクール」で歴史を教えており、またフランクフルト大学で、歴史教育学の授業も担当されていた。リービッヒ・ヨーロッパ・スクールは公立学校であり、生徒への調査等に対しては、学校長はもちろん、親権者の承諾、および教育委員会の承諾等が必要で、そのような手続きをお願いできたのはありがたかった。最終的に同校の中級・上級学年を中心に、8名に対し、アンケートと面接による調査を行うことができ、具体的な歴史の授業やその受け取り方、戦争に対する考え、あるいは当時話題になっていたネオナチに対してなど、10代後半の生徒たちの考えを聴くことができた。

またドイツは各州に文部省があり、教科書検定も各州が行う。そのよう

な要因を考慮し、フランクフルトの後、デュッセルドルフ大学（ノルトライン・ヴェストファーレン州）の「現代日本学」講座の協力を得て、9月11日、前半は8名のグループ・ディスカッションの形で、その後3名の大学院生たちの協力を得て、アンケート調査と面談を行うことができた。

最後に、共同研究を行うきっかけとなった、「ジェンダーで読み解く戦争」の授業時アンケートも、調査分析の参考になっている。この授業アンケートについては、すでに『関西大学人権問題研究室紀要』63号に「現代の大学生は戦争に関して何を学んできたか——「ジェンダーで読み解く戦争」受講者調査から」[守・豊田 2012:125-144]として掲載されている。

### 3 今後の論文発表の予定

このように、調査対象の選択に関しては、研究班メンバーの構成上制約があったことは否めないが、23名の語りには多様性があり、分析の可能性は大きい。多忙な中、調査の趣旨を理解し、1時間から2時間をインタビューに割いてくれた学生の皆さんに感謝したい。

今号の論文では、日本の大学生が家族の中で戦争がどのように語られてきたのか焦点を合わせている。今後の論文では、さらに学校教育、なかでも修学旅行や平和学習の果たした役割について、また映画やテレビ番組などのメディアに現れた戦争の視聴経験と家族や友人との共有の過程などについて、議論を展開していく。学校教育は、教科書の検定や学習指導要領を通して国からの統制を強く受けているが、その中で十分に教えられない問題（「従軍慰安婦」問題、靖国神社の役割など）について、大学生はどこから知識を得ているのだろうか。ナショナリズムが排外主義や周囲の国々との軋轢を高める傾向が問題となる中、大学生の戦争認識はナショナリズムとどのように関わっているのだろうか。また当初の問題関心は戦争の歴史をジェンダーの視点から見ることであったが、たとえば戦場で戦うのは男性であり、女性には他に適した役割があるといったジェンダー分業を前

提とした認識はどこから生じているのか。また、ドイツ調査と比較することで、日本での歴史教育や戦争についての認識を相対化してゆく。

本研究室ではこれらのテーマについて、今後2年程度に渡り、順次論文を紀要にて公表していく予定である。

付表（１） 事前調査票の設問（実際の調査票では、本人が空欄に記入する形式となっていた）

1. あなたの生育環境について、お聞きします。

- (1) あなたが育った家族の構成、家族員のだいたい年齢または生年、差し支えなければ職業等について教えてください。家族構成に変化があった場合、詳しいことは後のインタビューで話してください。ここでは自分の家族として最もイメージできる構成員を書いてください。
- (2) あなたの生まれ育った地域はどこか教えてください。  
(都道府県と市町村まででかまいません。転居していたら、それぞれの地域におおよそいつからいつまでいたかについても書いてください。)

2. あなたの学校歴についてお尋ねします。

- 小学校は地元の公立校に通いましたか、国立校・私立校などに通いましたか。公立であれば「公立」と書いてください。国立・私立であれば学校名を書いてください。

( 小学校)

- 中学校は地元の公立校に通いましたか、国立校・私立校などに通いましたか。公立であれば「公立」と書いてください。国立・私立であれば学校名を書いてください。

( 中学校)

- 通った高校は？ ( 立 高等学校)

3. これまでに戦争について聞いたり学んだりしてきたことがあると思いますが、それらの中で、一番印象に残っていたり気になっていたりすることはどのようなことですか。

4. あなたは、これまで学校教育（小学校から大学まで）を通して、戦争について何らかのことを学ぶ機会がありましたか。あったとすれば、①どのような内容をどの程度学びましたか。思い出せるだけいくつでも書いてください。②また、それぞれの内容を学んだのは、いつ（何歳または何年生の頃）、どのような機会に（何かの教科、修学旅行、宿題、行事など）でしたか。
5. あなたは、これまで学校教育以外で、戦争について何らかのことを知る機会がありましたか。あったとすれば、それを知ったのは、①誰または何によってですか（家族、親戚、友人、語り部などの人、漫画、本、映画、テレビ、ニュース、新聞、ネットなどのメディアなど）。②いつのことですか（何歳または何年生の頃）。③どのような内容をどの程度知りましたか。思い出せるだけいくつでも書いてください。
6. 戦争に関する以下の問いに対して、自由にお答えください。
- (1) あなたはなぜ戦争が起こると思いますか。
  - (2) どうすれば、戦争を止めることができると思いますか。
  - (3) もし日本が戦争しそうになったら、あなたは何か行動しますか。行動するとすれば何をしますか。
  - (4) 日本が戦争することになり、あなた自身やあなたにとって大切な人が徴兵されることになったら、あなたはどうしますか。
  - (5) 多くの国で、兵役に就いたり戦闘地域に行けたりするのは男性だけであるという制度を採用していますが、この制度についてどう思いますか。

付表（２）調査対象者リスト

NO.	調査年月	性別	出生年	専攻	出身地域
1	2011年6月	男性	1990年	人文	中国
2	2011年11月	男性	1989年	人文	近畿
3	2012年10月	女性	1993年	社会科学	近畿
4	2012年11月	女性	1990年	人文	近畿
5	2012年12月	男性	1992年	人文	近畿
6	2013年1月	女性	1992年	社会科学	近畿
7	2013年11月	男性	1992年	社会科学	近畿
8	2013年11月	男性	1991年	社会科学	近畿
9	2014年1月	女性	1991年	社会科学	近畿
10	2014年1月	女性	1994年	社会科学	中部
11	2014年1月	女性	1995年	社会科学	近畿
12	2014年1月	女性	1994年	社会科学	九州
13	2014年1月	男性	1991年	人文	四国
14	2014年1月	女性	1994?	社会科学	中部
15	2014年1月	男性	1994年	社会科学	四国
16	2014年2月	女性	1994年	人文	中部
17	2014年2月	女性	1991年	社会科学	近畿
18	2014年2月	男性	1994年	社会科学	近畿
19	2014年2月	女性	1991年	人文	中国
20	2014年6月	女性	1994年	理工	不明
21	2014年6月	男性	1994年	理工	四国
22	2014年6月	男性	1994年	社会科学	近畿
23	2014年6月	男性	1994年	理工	関東・近畿